優秀賞［高校生の部］ 今日的で切実な社会問題に真向から取り組んだ、勇気ある提案。解決策の実効性、子どもの笑顔が溢れる社会を作るという筆者のこだわりや強い思いが共感を集めました。

子どもの笑顔が溢れる社会
――ネットいじめ解決への提案

大阪府立佐野高等学校 3年
谷口 今日子 たにぐち きょうこ

「笑ってあげなさい。笑いたくなくても笑うのよ。笑顔が人間に必要なの」

これは、カトリック教会の修道女であるマザー・テレサの言葉だが、彼女は笑顔を作ることで世界が変わると考えた。彼女の言う、世界を変えるといった大きな話ではなくとも、笑顔には様々な効果がある。笑顔でいることで副交感神経が活発化してリラックスした状態を保つことができたり、良好な人間関係を築いたりすることにも役立つ。つまり、笑顔は人々の生活を豊かにする源である。

しかし、様々な理由から、笑いたいけれども笑うことができない人もいる。例えば、その理由の1つが「いじめ」である。私も小学生の時は、いじめに苦しむ子どもの1人だった。仲の良かった友達から無視され、私に話しかけてくれる友達はいなくなり、私物がトイレに投げ捨てられていたり、私の席がなくなっていたりということが日常茶飯事のように行われた。両親や担任の先生に言うことも出来ず、耐え凌ぐことしかできなかったが、そんな私に気づいてくれて手を差し伸べてくれる先生がいた。その先生が「よく頑張ったね」と、笑顔で声をかけてくれた時は涙が止まらなかったが、先生の笑顔は私の心を穏やかにさせ、いじめに立ち向かう勇気を与えてくれた。同時にその時私は、この先生のような教師となって、同じようにいじめに苦しむ子どもたちを助け、そして子どもたちを笑顔にできる存在となり、笑顔の大切さを伝えていきたいと強く思ったことを覚えている。

現代の教育現場でも、いじめ問題はとても深刻なものとなっている。近年では、スマートフォンの普及等もあり、インターネット上で行われる「ネットいじめ」というものが急速に増加してきた。ネットいじめは、ネット世界がいかに作られたものであっても、架空の世界では終わらず、リアル世界と必ず接点を持っており、そのことを子どもたちもよく知っているので、ネットいじめには逃げ場がないと言われる[1)]。

中でも、日本で約5,000万人が利用しているLINEを用いたいじめ事件の報道が目につき、深刻化していることがうかがえる。友達同士でメッセージや写真などを気軽にやり取りできる便利なものである一方、1人だけメッセージを読めないように設定したり、メッセージをすぐに読んで返信しないと既読無視と言われて仲間外れにされたりするが、加害者本人は相手の顔が見えずボタン1つで簡単にできるので、悪いことであるという認識が甘かったり、外部から閲覧できないように制限されたりするために、見えないところでネットいじめが増加しているのが現状である。

こうした状況に対して国は、携帯電話の学校への持ち込み禁止を提案したり、フィルタリングサービスをつけることを義務化したり、解決に向けて取り組みを行ってはいるが、その程度でネットいじめがなくなり、苦しんでいる子どもたちを笑顔にすることができるとは到底思えない。文部科学省も「ネット上のいじめに関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）【概要】」を平成20年1月に出しているが、その後新たに出てきたネットいじめの内容には対応できておらず、十分なものとは言えない[2)]。

では、こうした状況の中、どのようにすればネットいじめをなくし、ネットいじめに苦しむ子どもたちを笑顔にすることができるだろうか。私はこの解決策として2点提案したい。

1点目は、これまでも業者に委託して、インターネット上でいじめの発端となりそうなことをいち早く見つけ、子どもたちがトラブルに巻き込まれるのを未然に防ぐネットパトロールが実施されてきたが、「教師によるネットパトロール」を実施するということである。先生方の中には、「自分はTwitterやLINEは使わないからわからない」と仰る人もいるが、子どもが利用しているものを知らずに子どもをネットいじめから救うことはできないはずだ。そのために、各都道府県・市町村の教育委員会には予算を組んでもらい、先生方全てにTwitter等の利用方法や特徴について

学んでもらう。さらには、ネットパトロールを仕事としている企業から講師を招き、ネットパトロールのノウハウを身につけてもらう。このようにして教師自らがネットいじめに気を配ることで、気付けることが増えると考えられ、また、教師の目が及ぶという危機感が子どものいじめ行為への抑止力となることが期待される。

2点目は、教育カリキュラムの中に、必修科目として「コミュニケーション」という授業を導入することである。ネットいじめはインターネットを媒介にしていじめ行為が行われるが、そのインターネットを使用する私達のコミュニケーション能力の不足も大きな要因と考えられる。近年、若者のコミュニケーション能力が低下していると言われ、対面してのコミュニケーションもままならない人がいる中で、インターネット上の書き言葉の文字情報から相手の気持ちを推し量ったり、あるいは相手の立場で物事を考えたりするというのは難しいことなのかもしれない。言葉はすごい道具で、人を喜ばせたり怒らせたり様々な働きをするが、書き言葉の文字情報だけで正確に意思を伝えることは至難であり、これはコミュニケーションという点では弱点である[3)]。そこでこの授業では、互いに顔を合わせて自己紹介をするといった簡単なコミュニケーションから始め、LINE等の書き言葉の文字情報から情報を読み解く場合と対面して情報を読み解く場合とでは、内容の理解に差があることを実感する等といった体験型の授業形式を取る。必修科目とすることで全学校が行うことになるため、近くの学校と連携して、例えば各学校の生徒が混じったグループを作成し、実際に顔を合わせてコミュニケーションを取りながらネットいじめをテーマに設定してグループ発表を行うことで、見知らぬ人と上手にコミュニケーションを取っていく術を学ぶことができ、また、ネットいじめについての知識を得るといった効果も期待できる。

これらの提案は、勿論社会の仕組みを変えていかなければ実現することはできない。しかし、それが可能となった時に私自身がこうした提案を実行できるよう、高校卒業後、私は情報学や心理学、教育学等を総合的に学べる大学に進学し、インターネットに関する豊富な知識とスキルを身につけ、大学卒業後は教師として学校現場でネットいじめに苦しむ子どもたちを救い、その子どもたちを笑顔にしてあげたい。

子どもの笑顔が溢れる社会を創ることができれば、その子どもが成長して大人になった時、きっとその社会もまた笑顔が溢れる社会になっているのではないだろうか。これからの子ども、そして、いつか母となり自分の子どもが過ごす社会がそうした笑顔が溢れる社会となるように、私はこれから夢に向かって一歩一歩努力していく。

参考文献

1) 加納寛子「リゾーム的に増殖するネットいじめ」『現代のエスプリ』第492号 pp.40-53、至文堂、2008年
2) 文部科学省「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）【概要】、2008年 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf
3) 赤堀侃司「学校における情報モラル教育のあり方」『児童心理』2008年10月号臨時増刊pp.114-119、金子書房

［受賞者インタビュー］

論文を書いて応募したことで、過去の経験を越えて強くなれた

――コンテストに応募したきっかけは？

学校の先生に勧めていただきました。大学ではレポートや論文を書く機会が増えるので、その練習と思い、応募することにしました。

――論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

先生に添削指導していただいた時間も含めると、完成まで1～2週間ほどかかりました。

――この論文を書く上で苦労したことは？

2,500字程度という長い文章を書くことに慣れておらず、読み手に強く印象を残せるような文章を考えるということもほとんど経験のないことで、とても苦労しました。

――この論文を書いたことで良かったことは？

自分が過去にいじめに遭っていたという経験を晒すことはとてもためらいましたが、そのためらいを越えて、こうして論文を書いて発表できたことは、今までの自分より強くなれた気がして良かったです。

――今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

小説を読むことが自分の今の楽しみです。本を読むことで自分の知識を増やすことができますし、小説を読み、その物語に没頭している時が一番楽しいと感じます。